

染井霊園：医家の名墓を探る ①

坪井信道・坪井信良・緒方正規

堀江幸司

東京女子医科大学図書館

(1995年6月13日 受理)

染井霊園のことが気になっていた。本郷・駒籠高林寺に尾方洪庵の墓を詣でて以来のことである。¹⁾ 緒方洪庵の師である坪井信道(つばい・しんどう)の墓石が染井霊園にあることを知ったことである。都営霊園のうち、青山霊園と谷中霊園は、比較的よく紹介されている。とくに谷中霊園については、森、末武の労作がある。^{2) 3) 4) 5)} しかし、染井霊園については、取り上げられる機会も少ない。染井霊園はJR駒込駅またはJR巣鴨駅から徒歩約15分の場所に位置している。本郷通りと中山道に挟まれた閑静な場所である。拙宅は、この染井霊園の近くにある。桜の季節となったのを機会に、染井霊園にある医家の墓所を探ってみることにした。

六義園(りくぎえん)(東京都特別名勝・柳沢吉保庭園)の染井門を起点とする通称「染井通り」を染井霊園に向かって歩きはじめる。「染井通り」は、明暦3年(1657)におこった振袖火事(明暦大火)の復興の過程でつくられた道で、染井村の植木屋が多かった土地である。また、大名屋敷も多く、染井霊園に隣りあう東京スイミングセンターの辺り一帯は、藤堂和泉守の下屋敷であった。東京都染井霊園事務所付近に立って、「染井通り」を振り返ってみる(写真1・2)。染井霊園入口と天理教東京教務支廳および泰宗寺(たいそうじ)の前庭から「染井通り」に枝を伸ばして咲く染井吉野桜が、桜のトンネルをつくっているかのようにみえる。桜の花が空を狭くしている。淡紅白色の花びらが、空の青さを吸い込みながら、春の陽光のなかで眩しく光り、揺れていた。染井霊園周辺は、染井吉野桜(東京都の花)の発祥地である。^{注1)}

染井霊園は、明治5年(1871)11月28日に染井墓地として開設された神葬地で、明治7年(1873)9月1日、共葬墓地となった。神葬地としては、染井のほか、青山、雑司ヶ谷、深川があった。昭和10年(1935)5月に名称が染井墓地から染井霊園に改められ、現在は東京都公園協会によって管理されている。染井霊園は、もと播州林田藩主・建部(たけるべ)内匠頭の下屋敷跡。面積67,911m²。都営霊園の中では最も規模が小さい。休憩広場には、染井吉野桜が咲き乱れ、花見が行われる。また染井霊園



写真1. 東京都染井霊園入口付近（東京都染井霊園事務所）



写真2. 霊園入口から「染井通り」をみる

の土手沿いには、染井にふさわしく染井吉野桜が植えられ、大樹をなして桜道をつくる。霊園隅（二種<ハ>六号辺り）の染井吉野桜の老木は、大動脈から分枝を繰り返す血管

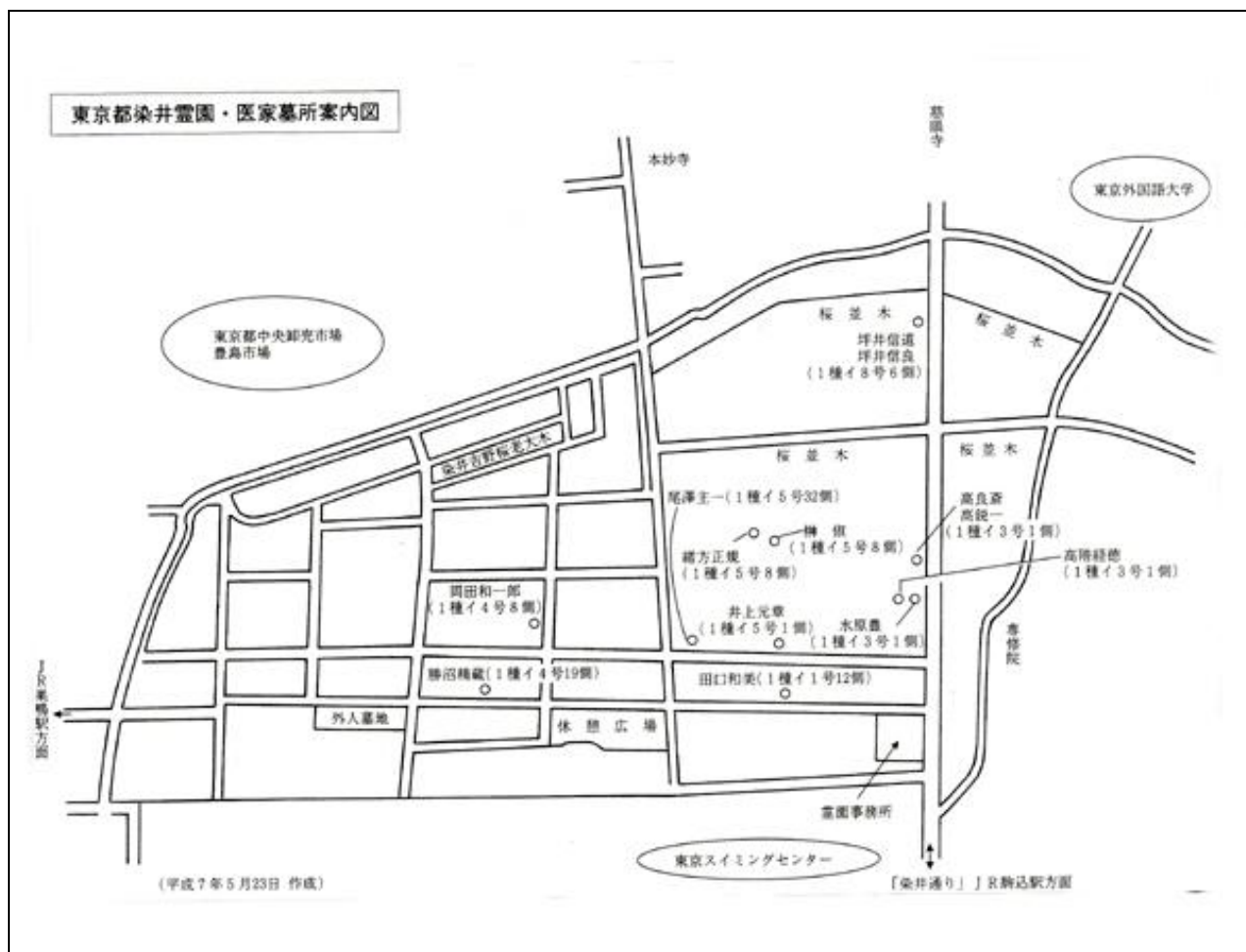


写真3. 霊園内の染井吉野桜の老木
(平成7年4月15日撮影 堀江幸司)

のように、空に向かって大きく枝を広げている。土手の上に散り積もった花びらが、淡い雪の名残のようにも見える。(写真3) この土手から、塀を隔てた向こう側が、東京都中央卸売市場豊島市場である。この辺りは、かつて、御薬園（渋江長菴御領地所）があった場所である。現在の東京外国語大学グラウンドが長池の趾である。長池からは、藍染川（矢田川）が流れ出し、上野・不忍池へとつながっていた。桜の花びらの上を歩いていると、往時の染井村^{注2)}の風景が想像される。

染井霊園には、著名人の墓⁶⁾として、小河一敏（おごう・かずとし）（尊王攘夷激派の志士）、藤堂高猷（とうどう・たかゆき）（伊勢津藩主）、二葉亭四迷（ロシア文学翻訳家・小説家）、岡倉天心（東京美術学校長）、幣原喜重郎（しではら・きじゅうろう）（首相）、若槻禮次郎（民政党総裁・首相）、濱尾新（東京帝国大学総長・文相）、高田早苗（早稲田大学総長）、松浦武四郎（蝦夷地開拓）、下岡蓮杖（しもおか・れんじょう）（写真師）、宮武外骨（著述家）、今村有隣（いまむら・ゆうりん）（フランス語学者）、高村光太郎（詩人・彫刻家）・智恵子などがある。

医家関係の墓には、坪井信道のほかに、坪井信良（しんりょう）（信道の養子）、高良斎（幕末の眼科医）、高鋭一（良斎の息子）、高階経徳（明治天皇の侍医）、井上元章（陸軍軍医）、尾澤主一（医学士）、緒方正規（おがた・まさのり）（東京帝国大学医科大学医学部教授・衛生学）、榭 俣（さかき・はじめ）（東京帝国大学医科大学教授・精神医学）、榭保三郎（さかき・ほさぶろう）（九州帝国大学医科大学教授・精神医学）、岡田和一郎（東京帝国大学医科大学医学部教授・耳鼻咽喉科学）、田口和美（たぐち・かずよし）（東京帝国大学医科大学教授・解剖学）、水原豊（秋桜子・しゅうおうし）（昭和医学専門学校教授・産婦人科学・俳人）、勝沼精蔵（名古屋大学長・内科学）などがある。



東京都染井霊園・医家墓所案内図（平成7年5月23日 堀江幸司作成）

○ 坪井 信道 (1795-1848)

没年月日：嘉永元年（1848）11月8日（54歳）

墓石の位置：1種イ8号6側

正面：誠軒先生之墓

左側面：墓誌

裏面：墓誌

坪井信道・信良の墓所は、染井霊園の「染井通り」につながる入口から入って、真直ぐに続く墓道を慈眼寺^{注3)}に抜ける手前にある。水原秋桜子、今村有隣の墓の前を通る。今村有隣の墓域内に建てられている「今村先生墓道之碑」をみると、緒方洪庵の名が刻まれている。撰文は濱尾新による。濱尾新の墓も、この染井霊園にある。緒方洪庵をめぐる人々が、隣り合わせに、この地に眠っている・・・そんなことを思いながら坪井家の墓所に向かう。坪井家の墓所は、ブロック塀で囲われていた。墓所から桜並木がみえる。墓石に花びらが、降り積もっていた。

墓域には、坪井信良の墓を中心にして、その向かって左に坪井正五郎、右に坪井信道（誠軒）の墓が並んでいる。（写真4）



写真4. 坪井家墓所

坪井信道の墓誌は左側面から背面にわたって刻まれている。墓石の一部が欠損し、ひび割れがみられる。関東大震災によるものと思われる。墓誌の全文が富士川游の著作^{7) 8)}に記録されていたので補って読んだ。この墓石は、嗣・信友によって建てられたものである。

坪井信道は美濃國(岐阜県)池田郡脛永村の出身。^{7) 8) 9)}名は道。信道は字。号は誠軒。父は信之。坪井家は、もと岐阜城主・織田秀信から出ている。

広島で中井厚沢につき、文政3年(1820)江戸に出て津山藩・宇田川榛斎(うだがわ・しんさい)(1769-1834)に西洋医方を学んだ。文政12年(1829)、深川上木場三好町に開業し、かたわら学塾安懐堂を開いて子弟を教育した。蘭方医学の先覚者の一人であり、伊東玄朴、戸塚静海と交友して、江戸三大西洋医家をもって知られる。伊東玄朴は臨床家、坪井信道は蘭医学者と評された。

門人には、青木周弼(しゅうひつ)、杉田成卿(せいきょう)、川本幸民、緒方洪庵、桑田立斎、戸塚文海らがいた。緒方洪庵の入門は、天保2年(1831)2月、信道36歳、洪庵22歳のときであった。

天保7年(1836)、深川冬木町に移って日習堂を開く。天保9年(1838)、長州藩・萩侯の侍医となる。「神経熱論」、「万病治準」、「病理論」、「遠西二十四方」、「内病論」、「信侯大概」などの訳著も多い。妻(青地林宗娘)との間に三男二女をもうけた。長男・信友、次男・亀也、三男・信敬、長女・牧、二女・幾の5人である。

嘉永元年(1848)、坪井信道は、肺病を患って8月16日に床につき、11月8日昼過ぎに逝去した。病床にあった80日余りの間、伊東玄朴らが、日々来診施治したという。享年54歳。浅草誓願寺に葬られた。

坪井信道が葬られた浅草誓願寺は、田島山快樂院と号し、浄土宗江戸4ヶ寺の一つで天正18年(1590)相模小田原に創建された。のち江戸に移り、神田白銀町(須田町)を経て、明暦大火後、寛文元年(1661)浅草田島町に移った。誓願寺の子院には、坪井信道の墓のほか、小野蘭山、宇田川榛斎などの著名人の墓が数多くあった。誓願寺は多磨霊園近くに移転し、坪井信道、宇田川榛斎の墓も多磨霊園(府中市多磨町4丁目)に移された。『東京掃苔録』(昭和15年刊)¹⁰⁾には、坪井信道の墓は、多磨霊園の第五区乙三側と記載されているが、その後、現在の染井霊園に改葬されたようである。

坪井信道の門人のひとり川本幸民(洋書調所教授)の墓は、浅草曹源寺(カッパ寺)にあったが、明治34年(1901)2月、改葬されて、現在は、雑司ヶ谷霊園(豊島区南池袋4丁目)の1種2号1側にある。合葬されている川本幸民の妻は、青木林宗の三女・秀で、坪井信道と川本幸民とは、義兄弟の関係となる。

○ 坪井 信良 (1825-1904)

没年月日：明治37年(1904)11月9日(82歳)

墓石の位置：1種イ8号6側

正面：坪井信良・與能子之墓

側面：坪井信良略歴・墓誌

背面：後妻與能子墓誌

坪井信良は、文政8年(1825)8月18日、越中國(富山県)射水郡高岡の佐渡家に生まれる。幼名末三郎のち良益と改める。天保11年(1840)、京都の小石元瑞に学び、天保14年(1843)、江戸の坪井信道に入門。弘化元年(1844)、坪井信道の養子となり信良と改名した。弘化4年(1847)、大坂の緒方洪庵に学ぶ。嘉永元年(1848)、坪井信道の長女・牧と結婚する。同年、坪井信道が病没し、以後、遺業を襲いで医療に従った。

嘉永6年(1853)、福井藩主・松平春嶽(しゅんがく)公に仕える。安政5年(1858)、蕃書調所助教を命ぜられ、蘭書の翻訳にあたった。この安政5年(1858)の5月7日に、伊東玄朴、戸塚静海、林洞海らと、御玉ヶ池種痘所をはじめめる。これが、現在の東京大学医学部のはじまりである。元治元年(1864)、妻を亡くし、同年奥医師に挙げられ、12月に旧幕臣荒井精兵衛の娘・與能子を後妻とした。妻となった與能子は、天保3年(1832)の生まれで、和歌を中島歌子に学び、明治41年(1908)4月4日に77歳で歿した。墓石の正面の「坪井信良之墓」の文字の横に「與能子」と刻まれている。

明治元年(1868)、坪井信良は、静岡に移住し、翌年静岡病院副院長を命じられた。安政5年(1858)、明新館が創設されて、11年間にわたって漢学を教育していたが、慶応4年(1868)に廃校となり、明治2年(1869)2月21日、その建物を利用して静岡病院(藩立駿府病院)が開設された。病院頭(病院長)には林研海、同並(副病院長)には、坪井信良と戸塚文海が、採用された。明治6年(1873)、坪井信良は、東京に出る。翌明治7年(1874)東京府病院に出仕したが3年で退職した。明治16年(1883)還暦を迎え、家督を坪井正五郎(人類学者)に譲った。坪井正五郎の妻が、箕作秋坪の娘・尚子である。坪井正五郎の墓誌の中に箕作姓を見いだしたとき、岡山県津山市に箕作阮甫の旧宅を訪ねたことを思い出した。¹¹⁾ 津山市林田の丘にある箕作家墓所から眺めた吉井川の景観がすばらしかった。また、いつの日か、全山五千本といわれる鶴山公園の桜を見に行きたいと思う。

坪井信良の義弟が、坪井為春（ためはる）（号は芳州）（大木忠益）である。^{12) 13)} 慶応3年（1867）1月、坪井芳州は、医学所（のちの東京大学医学部）の教授として、薬剤学を石黒忠憲、長谷川泰、渡辺洪基、大沢謙二らに教えている。この時の頭取が松本良順であった。¹⁴⁾

坪井為春の息子に坪井次郎がいる。¹⁵⁾ 坪井正五郎とは、義兄弟の関係となる。坪井次郎は、明治18年（1885）5月16日、東京大学御用係（準助教授）となり、翌明治19年（1886）大学助手（衛生学）となった。ここで、緒方正規（衛生学教授）につながる。坪井次郎は、後年、京都帝国大学医科大学長を務め、衛生学教室を創設した。坪井為春は、谷中霊園の甲2号8側に孫の坪井芳治（よしはる）（小児科）¹⁶⁾とともに葬られている。

坪井信良の事蹟の一つとして、宇田川興斎（宇田川榕庵の養嗣子）の墓誌の撰文（明治二十一年五月）がある。現在、その墓石は、忘れ去られたかのように、雑司ヶ谷霊園の1種2号6側に置かれている。

明治37年（1904）11月9日、坪井信良逝去。享年82歳であった。葬儀は、14日午後1時から染井墓地斎場にて行われた。濱尾新、石黒忠憲、長谷川泰、三宅秀らが会葬した。¹⁷⁾

○ 緒方 正規（1853-1919）

没年月日：大正8年（1919）7月30日（67歳）

墓石の位置：1種イ5号8側

正面：東京帝国大学教授正三位勲一等医学博士緒方正規墓

側面：法号顕正院积規眞居士 嘉永六年十一月五日於熊本縣八代郡 川俣村生

大正八年七月三十日於東京薨去 行年六十七歳

緒方正規の墓所は、霊園中央付近の樹木の下にある。（写真6）早朝に霊園内を散策していたら、眼前に「緒方正規墓」があらわれた。墓石は、桜の樹の下の柔らかな間接光の中に置かれていた。墓石が眼に入ったというよりは、墓石に刻まれた文字が浮き出てみえたという感じであった。書体がゆれていた。

「緒方正規墓」の左隣に先妻小梅の墓（榊小梅子墓）があり、墓所の入口右手に後妻石原エツの墓がある。

緒方正規（写真5）は、嘉永6年（1865）、肥後國（熊本県）河俣村小字鶴に生まれる。^{18) 19) 20)} 河俣村は、熊本市より約48Km離れた山間の僻地で明治初年の戸数は360戸余りであったという。父の玄春は、藩主細川家の侍医黄玄朴について漢方医学を学んだ人で、正規18歳の時に医学を修めることをすすめる。正規は、これを「医学は人の苦痛や悲哀に接して楽しむところがない」として拒んだ。しかし、玄春の「漢方医ではなく西洋医で、医学の基礎は博物学を基礎として、人体の解剖・生理・病理を学び疾病を治療すること」という説得によって、医学の道に進む決心がつくことになる。明治3年（1870）、熊本医学校に入り、濱田玄達、北里柴三郎らと蘭学をはじめ。明治4年（1871）10月、熊本医学校を退き上京。熊本百宮より汽船天赦丸で長崎へ行き、萬里丸に乗り換えて、兵庫着。兵庫からは東海道を徒歩で横浜へ向かった。13日間の行程であったという。明治5年（1872）2月、大学南校（洋学系）へ入学。7月に東校（医学系）へ転学した。明治13年（1880）春、卒業して、ベルツ（Erwin von Baelz, 1849-1913）の助手となって、月30円の手当を受けた。この明治13年（1880）、ドイツへ留学。明治17年（1884）12月末に帰朝。本郷区駒込東片町（ひがしかたまち）百六十番地（現在の文京区向丘一丁目）に住んだ。駒込東片町の東片とは、中山道の東の片側という意味である。追分（現在の東京大学農学部前交差点付近）から巢鴨方向につながる駒込東片町には、当時、東京府癩狂院があった。



写真5. 緒方正規（1853-1919）



写真6. 緒方家墓所

明治18年(1885)1月, 緒方正規は, 東京大学医学部(第一次)御用係となり, 衛生学・細菌学を担当することになる。また, 内務省東京試験所に兼務した。長與専齋が研究助手を務めたという。明治19年(1886)に東京大学医学部は, 帝国大学令の発布により改組されて, 帝国大学医科大学となり, 緒方正規が, その教授に任命された。明治21年(1888), 医学博士の学位を受けられ, 明治24年(1891)から明治27年(1894)まで, 海軍省に兼務し細菌学を講授した。明治31年(1898)9月には, 濱田玄達(産科学婦人科学教授)の後任として, 東京帝国大学医科大学長に補せられ太。明治43年(1910)4月16日, 在職25年祝賀会が, 東京帝国大学理科大学付属植物園(小石川植物園)の集会場において盛大に開催されている。^{21) 22)}

大正8年(1919)4月頃より, 食道狭窄の徴候があり, 7月22日に至って肺壞疽を併発。稲田竜吉(内科)を主治医として, 自宅で療養を続けたが, 30日午後3時40分逝去した。^{23) 24) 25)} 8月3日, 遺骸を東京帝国大学医学部病理学教室に移し, 山脇

勝三郎教授によって解剖された。病理解剖学診断は、「食道下部の癌腫性腫瘍及びその穿孔に因する肺壊疽並びに心尖部における腫瘍転移」であった。

葬儀は、小金井良精（解剖学教授）を委員長として、8月4日午後3時から染井墓地斎場において、仏式で行われた。²⁶⁾ 上京して葬儀に参列したもののなかに、官立新潟医学専門学校（現在の新潟大学医学部）の宮路重嗣（衛生学）がいた。昭和2年（1927）11月に新潟で第1回官立医科大学附属図書館協議会（現在の日本医学図書館協会総会のはじまり）を主宰した人物である。宮路重嗣は、大正3年（1914）9月に東京帝国大学から新潟に移り、衛生学細菌学講座を創設していたのである。

葬儀後、霊柩は列を整え、町屋火葬所に向かい、荼毘にふされ、翌5日、遺骨が染井墓地に葬られた。

葬儀委員長となった小金井良精は、緒方正規が亡くなった翌年に、高輪泉岳寺に自分用の墓地を買っている。友人であった緒方正規の死も影響したのかもしれない。小金井良精の晩年の日記には、友の墓参に、しばしば染井墓地を訪ねたことが記されている。

緒方正規の墓の右隣にある「緒方家之墓」には、息子の緒方規雄が葬られている。緒方規雄は、明治20年（1887）東京に生まれ、大正5年（1916）東京帝国大学医科大学を卒業。大正10年（1921）千葉医学専門学校教授となり、帝国女子医学専門学校（のちの東邦大学医学部）教授、日本歯科大学教授を歴任した。専門は細菌学であった。また、緒方規雄は、医科大学附属図書館協議会（現在の日本医学図書館協会）にも関係していた。第7回（仙台・昭和8年）と第8回（大阪・昭和9年）の総会に千葉医科大学の附属図書館長として参加している。

昭和45年（1970）2月6日午後12時15分、緒方規雄は、心不全のため駒込の自邸で逝去した。告別式は、9日午後1時より、本郷・一音寺で行われ、父正規の墓所である染井霊園に葬られた。

（次回に続く）

注1) 染井吉野桜：ソメイヨシノは江戸時代末期に染井村の植木屋伊藤伊兵衛によって吉野桜として売り出された桜で、明治33年（1900）になって、発祥地にちなんでソメイヨシノ（染井吉野）と命名された。ソメイヨシノは、オオシマザクラ（大島桜）とエドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）を交配したもので、「染井通り」に面した本郷高等学校前の「豊島区立そめいよしの児童遊園」（平成6年開園）には、オ

オシマザクラとエドヒガンザクラが植えられて、ソメイヨシノとの違いがわかるようになっている。伊藤伊兵衛（4代目）政武の墓がある西福寺（駒込小学校隣）には「染井吉野の里」の碑がある。

注2) 染井村：現在の東京都豊島区駒込6，7丁目付近。

注3) 慈眼寺：芥川龍之介，谷崎潤一郎，司馬江漢（しば・こうかん）（江戸時代後期の洋風画家・蘭学者），斎藤鶴磯（さいとう・かつき）（江戸時代後期の儒学者）の墓がある。司馬江漢，斎藤鶴磯の墓は，東京都旧跡（昭和5年6月2日）に指定されている。

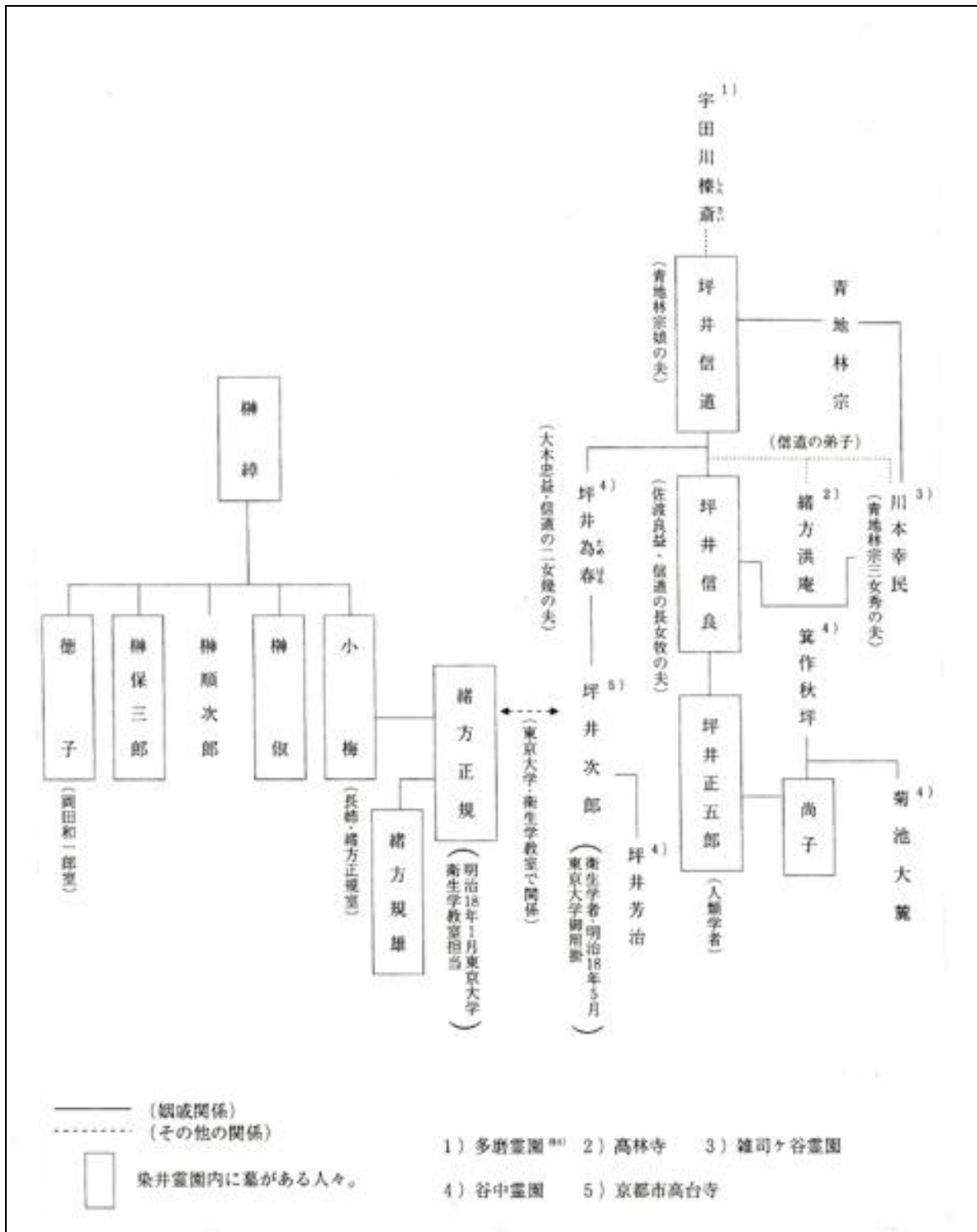
注4) 宇田川家多磨霊園墓所：平成7年9月12日現地調査の結果，宇田川家の墓石は一部を残して墓域（5区1種6側46番地）から撤去されていることが判明した。

参 考 文 献

- 1) 堀江幸司. 本郷・駒籠高林寺：緒方洪庵追責碑と節齋岡先生碑. 医学図書館 1993;40(4):427-32.
- 2) 森まゆみ. 谷中墓地掃苔録：森の中に眠る人々 一. 東京：谷根千工房，1989.
- 3) 森まゆみ. 谷中墓地掃苔録：森の中に眠る人々 二. 東京：谷根千工房，1991.
- 4) 森まゆみ. 谷中墓地掃苔録：森の中に眠る人々 三. 東京：谷根千工房，1992.
- 5) 谷中過去帳：谷中寺町人物博物館目録. 末武芳一編 1994.
- 6) 豊島の墓石：著名人の墓（その一）染井霊園（豊島あちらこちら 第八集）. 東京：東京都豊島区教育委員会，1982.
- 7) 坪井誠軒先生. 『富士川游著作集7（伝記1）』. 京都：思文閣出版，1980.
- 8) 坪井誠軒先生. 中外医事新報 1892;299:945-8.
- 9) 北沢正誠，今村 亮，松尾耕三. 蘭学者傳記資料. 東京：青史社，1980.
- 10) 藤浪和子. 東京掃苔録. 東京：八木書店，1973.（復刻版）
- 11) 堀江幸司. 津山に箕作阮甫の史跡を訪ねて. 医学図書館 1987;34(1):82-4.
- 12) 坪井為春先生伝. 東京医事新誌. 1886;433:973-4.
- 13) 坪井為春先生伝. 東京医事新誌. 1886;434:1005-6.
- 14) 石黒忠憲. 懐旧九十年. 東京：岩波書店，1984.

- 15) 泉彪之助. 衛生学者坪井次郎の経歴と業績. 日本医史学雑誌 1992;38(3):401-20.
- 16) 泉彪之助. 医師坪井芳治の家系と経歴. 日本医史学雑誌 1989;35(1):59-70.
- 17) 坪井信良翁病没. 中外医事新報 1904;593:1644.
- 18) 故緒方正規先生自叙傳及他二篇. 衛生学伝染病学雑誌 1919;15(2)120-40.
- 19) 緒方正規先生生誕百年記念座談会. 日本医事新報 1953;1507;1005-28.
- 20) 衛生学の黎明を語る<座談会>. 日本医事新報 1961;1956:29-57.
- 21) 緒方教授在職二十五年記念祝賀会. 医事新聞 1910;804;638-9.
- 22) 緒方教授記念祝賀会. 東京医事新誌 1910;1662:861-6.
- 23) 緒方正規氏逝去. 中外医事新報 1919;945:929-30.
- 24) 東大教授緒方正規博士の薨去. 東京医事新誌 1919;2137:1470-1.
- 25) 緒方東大教授の薨去. 東京医事新誌 1919;2138:1512-4.
- 26) 本会会頭医学博士緒方正規先生葬儀. 衛生学伝染病学雑誌 1919;15(2):140-5.
- 27) (訃報) 緒方規雄. 日本医事新報 1970;2390:105.
- 28) 千葉大学医学部八十五年史. 千葉:千葉大学医学部創立八十五周年記念会, 1964.

(平成21年11月10日 個人リポジトリ登録)



染井霊園医家関係略図 (堀江幸司作成)